平成 29 年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート
謝　春游

１．事業実施の目的
博士論文の研究課題に関わる予備調査の実施。
２．　実施場所　広東省の東莞市、中山市、広州市、深圳市
３．　実施期日　平成 30 年 2 月 14 日（水）から 3 月 10 日（土）
４．成果報告
●事業の概要
報告者は、中国の広東省において、中国の他の地域からの長期的移住者たちの家庭における春節（旧正月）および普段の食生活、特に広東省に生まれ成長している子供の食生活の状況に関わる調査を行なった。本調査の目的は、今回収集したデータと報告者の博士論文で取り上げる「在日中国系住民の食生活の状況」という課題に関した調査のデータと比較することで、移住者たちの食生活の状況は、国内と国外とでどのような違いが生じているかを論じることである。

今回の調査は、主に広東省の東莞市、中山市、広州市、深圳市に居住している長期的な移住者たちそれぞれの家庭における食生活の状況に関する聞き取り調査を実施した。聞き取り調査の内容について、具体的な調査の項目は、①広東省に来た時間、広東省における生活経緯、家族構成といった基本情報、②平日と休日それぞれ食事（外食を含む）の内容や食事の形、③中国の伝統的な祝日に関わる食べ物の消費状況、④食料品の購入状況、⑤子供たちの学校給食の状況、⑥被調査者自身が感じた来粤（広東省の別称）前後の食生活の変化、以上の 6 項目であった。これらによって、広東省の長期的な移住者たちと彼らの子供世代の食生活の実態を把握した。

今回、広東省における 22 家庭の長期移住者の家庭において、彼らの食生活に関わる参与観察（一部分の家庭）および聞き取り調査を実施した。予定していた学校給食に関する調査は、現場での調査許可がおりず、その代わりに、調査対象からの聞き取り調査を通じて、学校給食の状況を把握した。

今回の調査により、把握した具体的な状況は、以下のようになっている。

① 食事の作り手について： 40%の家庭（9 家庭）は、祖父母（祖父だけ、祖母だけ、祖父母両方）、両親、子供三世代共住である。多くの場合は、両親共働きで、主に祖父母が子供の面倒や、家族の食事を準備している。核家族家庭には、母親だけではなく、父親も食事の準備に力を入れている。

② 一食の構成について：「一葷一素一湯（動物性料理一品、野菜料理一品、スープ一品）」（人数によって、おかずの品種が増える）が基本となっていた。各家庭において、毎日食事を準備する人がいる場合は、平日と休日の食生活に大きな差異はない。共働きの核家族家庭には、休日には平日になかなかできない手間がかかりそうな料理または

より栄養豊かだと考えている料理をする傾向がある。

③ 祝日の食べ物について：中国の伝統的な祝日のときには、それぞれに関わる食べ物を意識的に買って食べている。ただし、多くの中国四川省や湖南省などの出身者は、春節の時期によく食べられている「腊肉（燻製の肉類）」や「香腸（燻製のソーセージ）」などを移住先で作るか、それとも実家の親戚に頼んで作ってもらって食している。

④ 食材について：普段の食材に関しては、現地購入（近くのスーパーまたは農貿市場）、自家栽培（一部分の野菜）、故郷から持込（自分または親戚、近所の人）という主な三つの入手ルートが見られる。

⑤ 子供たちの学校給食について：公立の小中学校の生徒は主に地元出身の学生であり、学生向けの食堂がないことに対して、私立の小中学校生徒は、ほぼ全員が地元以外の戸籍を持っており、学校には学生向けの食堂が設置されていることが分かった。生徒たちは主として、学校の食堂、または「午託」とよばれる学校周辺に設けられた民間施設、自宅で昼食をとっていた。

⑥ 被調査者の大半は広東省に 10 年間以上居住しており、以前塩分や唐辛子などの調味料の使用は減少する傾向がある。また、広東省に長年住むと、人間がその地域の料理を作るようになった。

長期的移住者の家庭内の食生活に関わる調査以外に、広東省立中山図書館において、広東省への出稼ぎ者が増加し始めた頃の 1990 年代前後、当時の食生活や移住者に関した文献資料を収集した。また、調査地では年に一回開催される「元宵歓聚活動（食事会）」に参与観察の調査ができて、地元の食文化を自ら体験できた。その食事会は地元の人々と外へ出ている地元出身の人々とのつながりを深めるために、「元宵節」とよばれる春節の終日に調査地の委員会に主催されているイベントである。参加者を基本的に地元の 60 歳以上の方々、現在中国大陸以外の地域に生活している地元出身の方々および彼らの家族の方々に限定することになっていた。

●本事業の実施によって得られた成果

今回の現地調査では、広東省の長期的移住者たちと彼らの次世代の食生活の状況を概観することができた。まず、中国広東省における内陸からの長期的な移住者たちの世代間による食生活の差異は、報告者がこれまで予備調査的に調査してきた日本における在日中国系住民の食生活とは異なることが予察された。また、給食制度の有無が、学校教育を受けている世代の食生活の習慣形成に与える影響を別途検証していく必要がある。それに、現地で入手可能の 1990 年代前後の新聞、雑誌、書籍といった刊行物を中心とする文献資料を渉猟することができた。それは、広東省における移住者の存在に関わる社会的背景を検討していく上で重要な参考資料になると思われる。

中国広東省における内陸からの長期的な移住者たちの家庭の食生活の状況、特に広東省に生まれ成長している子供たちの食生活の状況は、中国における居住環境や、食に関わる情

報の流通、食事を作る側の飲食観などと深く関連しているという予察を行うことができた。今回の調査によって得られた中国国内における長期移住者の家庭の食生活状況に関するデータは、報告者の日本で行った博士論文の予備調査のデータと比較対照を行うことで、移住者たちの食生活の状況は、国内と国外とでどのような違いが生じているかを論じることが可能となり、博士論文の主要な課題となる、在日中国系住民の食生活を相対化させていくうえで重要な視点をえることができた。

●本事業について

本事業により、中国広東省における、中国国内移住者の食生活に関する現地調査を実施することは可能となり、博士論文の内容に関する理論的、方法論的展開に見通しを得ることができた。

本事業は、学生が博士課程における研究を進めていくうえで、基礎データの収集や、方法論的示唆を得るための調査を実施する機会を提供する点においてきわめて実りの多いものであると考えている。今後とも、このような事業が継続されることを強く希望する。